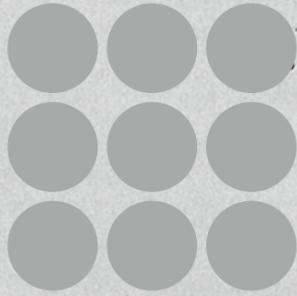


特集 不変の羅針盤



宮内卿法印保正之公

今年は
会津藩祖保科正之公が
生まれてから、
ちょうど400年の
節目の年。
会津藩の礎をつくり、
本町とも関わりの深い
正之公。
徳川幕府、会津藩の
羅針盤として
民衆を守ることを第一に考え
見事なリーダーシップを
発揮し名君と呼ばれた。
数々の功績を残した
正之公の人柄や手腕から
私たちが現代を生きぬく
教訓を探る。

保科正之公 (土津神社所蔵 写真協力/福島県立博物館)



Pick Up 今月のイベント

第10回 母から子への 手紙コンテスト

第10回「母から子への手紙コンテスト」の表彰式は12月4日、学びいなかで開かれました。応募総数1828点の中から、町内のお母さん76人と最終選考委員の玄侑宗久さん、大石邦子さん、末利光さん、小林光子さんの4人が選んだ50点の入賞作品が決まりました。大賞を受賞した菊池さんの作品は、思わず涙があふれる感動作。学びの泉で紹介していますので、ユーモアにあふれる準大賞の作品を紹介します。

準大賞

芦田朝子(東京都)

息子よ、『鈍子』を『ギョーザ』と読み、『福沢諭吉』を『福山まさきはる』と書いた息子よ。AKBのメンバーの名前は全部言えるのに、都道府県名は覚えられないのはなぜ。テストを見るたびに、母は泣けてきたよ。でも、いいんだ、息子よ。あなたが初めて数学で四十点をとった日に、母は学んだ。あの日、母が帰ると、玄関の外の扉に四十点のテストが貼ってあった。母は感動した。普通、四十点を貼られるのは罰ゲームだろう。九十点でもくやしがる子がいるというのに、四十点を誇らしげに貼るあなたは、大した奴だ。成績は絶対評価だ。パーセントで上から割り当てられる。でも幸せは絶対評価だ。これでよし、と思ったら百パーセント幸せなんだ。あなたは、「四十点しか」を「四十点も」と言える幸せな男だ。息子よ。あなたには、幸せになる才能がある。母がそれを保証する。もう、そのまま突き進め。

まちの応援マガジン いなわしろ

広報 猪苗代

Dec.2011
12
No.614

今月の表紙



今日は練習の成果を見せる発表会。パパやママ、おじいちゃんやおばあちゃんも見に来てくれてうれしいな。ちょっと緊張してるけど大丈夫。いっぱい練習したから、きっと上手にできるよ。

川桁保育所保育発表会

【撮影日】 12月3日
【撮影場所】 学びいな

Contents — 【目次】

- 02 PICK UP
- 03 特集
不変の羅針盤
- 18 自治功労者表彰式・合同表彰式感謝状伝達式
- 20 町の元気を内外に発信
- 22 スクールトピックス & ニュース INAWASHIRO
- 24 まちのわだい
- 26 笑顔でこんにちは/善意をありがとうございました/保健だより
- 28 学びの泉
- 30 いなわしろタウンページ
- 34 暮らしの情報広場
- 36 みんなの美術館/食生活改善推進員コーナー

名君 保科正之公の生涯

徳川2代将軍秀忠公とお静の方の子として生まれた後、正之公はどんな人生を歩んだのか。名君と呼ばれた人格は、どのような環境で形成されていったのか。正之公の生涯を振り返る。



高遠城
春になると桜が咲き誇る高遠町の名所
(長野県伊那市高遠町)



高遠藩主 保科正光
正光は、建福寺の鉄舟和尚を学問の師に、有能な藩士を守り役につけ、幸松を育てた
建福寺(会津若松市)所蔵写真協力/会津若松市

山形城
山形時代は、秋田の佐竹氏、米沢の上杉氏、仙台の伊達氏など反徳川勢力の押さえとなった(山形県山形市)



若松城
正之公は、会津藩に入封すると次々と政令を出し、武家だけでなく、民衆のための制度改革に取り組んだ。学問も奨励し、庶民の学問所、稽古堂は、無税の上、年に2両の修理費も支払われた(福島県会津若松市)

保科正之は慶長16(1611)年、徳川2代将軍秀忠と静(後の浄光院)の子として生まれた。側室を持たなかった秀忠は、乳母・大姥殿のもとに通ううちに侍女として仕えていたお静を見初め、寵愛したと言われている。お静は、秀忠の正室・お江の方の怒りを恐れ、武田信玄の娘・信松院のもとで正之(幼名幸松)を出産。その後、お静と幸松は、信松院の姉・見性院のもとでかくまわれて育てられた。成長した幸松の身を案じた見性院は、7歳になった幸松とお静を信州高遠藩藩主、保科正光に託した。正光は、秀忠の内諾を得て幸松を養子として迎える。民政に篤い正光とその部下の教育が、後の正之の人格に影響したことは想像に難くない。

寛永8(1631)年、正光が没すると、幸松は名前を正之と改め、高遠藩3万石の2代藩主となった。翌年、実父、秀忠が逝去。義兄の家光が3代将軍の地位に就いた。家光は弟、正之を日光社参りや明正天皇即位祝賀の上洛に随行させるなど、ことのほか気にかけて。この辺りから正之は、世に將軍の子として認められていった。

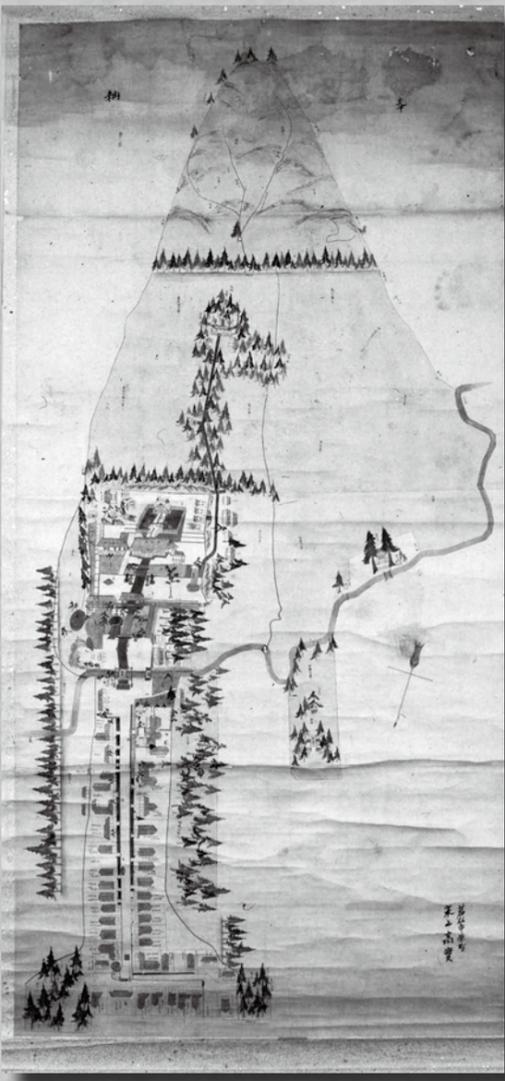
このことを一番に喜んだ母、浄光院だったが、寛永12(1635)年に病のため逝去。正之は愛する母を高遠町の長遠寺に葬り、名を浄光寺と改めた。その後、正之は移封される先々に浄光寺を建立し、母への祈りと感謝の気持ちを生涯忘れなかった。

寛永13(1636)年には出羽山形藩20万石を拝領。高遠時代からの家臣や新たな土官希望者とともに内政を確立。当時、幕府の力が十分に及ばなかった東北で、徳川家の拠点となった。このような実績が認められ、寛永20(1643)年、東北の要、会津藩に入封された。会津の23万石のほか、南会津の5万1200石余りを私領同様として預けられた正之は、名実ともに徳川御三家に次ぐ大名となった。以後、正之の子孫の会津松平家が幕末まで会津藩主を務めた。

正之に絶大な信頼を寄せていた家光は、死に際に正之を枕元に呼び寄せ「肥後(正之)よ宗家(徳川家)を頼みおくといい。残り、4代将軍家綱の後見役に指名した。

保科正之公の略年表

- 慶長16(1611)年
5月7日、徳川2代将軍秀忠とお静の方の子として江戸に生まれる。幼名は幸松。
- 元和3(1617)年
信州高遠城主、保科正光の養子になり、高遠に移る。
- 寛永8(1631)年
養父、保科正光が江戸で没する。名前を正之と改め、高遠藩3万石の藩主になる。従五位下の爵位を拝命、肥後守を襲名する。
- 寛永9(1632)年
実父、2代将軍秀忠が没する。母、お静の方は仏門に入り、名前を浄光院と改める。
- 寛永12(1635)年
実母、浄光院が没する。高遠の長遠寺に葬り、名を浄光寺と改める。
- 寛永13(1636)年
山形藩20万石の藩主になる。
- 寛永20(1643)年
会津藩23万石の藩主になる。朝鮮通信使来朝。正之が応接の役を担う。
- 生保2(1645)年
左近衛権少将を受任、家綱の元服で烏帽子親を勤める。
- 慶安4(1651)年
三代将軍家光が危篤に陥る。將軍嗣子家綱の後見役を正之に依頼し没する。
- 承応元(1652)年
軍制改革を実施。新たに軍令・軍禁・家中掟・道中掟を定める。幕府儒医土岐長元に命じ、「輔養編」を編さんさせる。
- 承応2(1653)年
4代将軍家綱に代わって上洛。従三位中将を下されるも、家綱に献上、正四位下だけを受ける。
- 承応3(1654)年
玉川上水が開削される。
- 明暦元(1655)年
社倉制を実施する。
- 明暦3(1657)年
江戸で明暦の大火がおきる。江戸城、会津藩芝屋敷が焼ける。回向院建立。米蔵解放。正之の嗣子正頼が没する。
- 万治2(1659)年
正之の意見で天守閣のない江戸城を再建。



土津神社絵図 (土津神社所蔵・福島県立博物館寄託 写真提供/福島県立博物館)



2 晩年の正之公 (土津神社所蔵・写真協力/会津若松市)
3 磐梯神社 (猪苗代町)



1 正之公の墳墓 (会津松平家墓所・国指定史跡)

会津の守護神、正之公に思いを はせて



土津神社 宮司
宮澤 重正 さん

猪苗代には、磐梯山の総鎮守磐梯神社がある。延喜式の古い神社で、会津若松市の蚕養国神社や会津美里町の伊佐須美神社と同じく千数百年の歴史がある。町民の信仰の対象は、古くから磐梯神社だった。

正之公は藩内の神社仏閣の整備を行うなど神仏を大事にした人物。自身を磐梯神社の近くに埋葬するように遺言している。磐梯神社へ続く参道には、高遠以来の家臣である田中正玄の墓もある。信頼を寄せた家臣と共に眠りたい。そんな思いもあつたのかもしれない。数十年前、土津神社を参拝する町民は少なかった。正之公は、猪苗代だけではなく、会津全体のお殿様。会津の守護神として土津神社に祭られた。つまり、土津神社は会津の総鎮守である。そのため、一般の町民は恐れ多いと感じて、参拝しづらかったのではないかと、今年、正之公は生誕400年を迎えた。昨年から記念事業などと相まって、正之公に対する注目は徐々に高まっている。町民の皆さんも神社を訪れ、私たちの殿様の功績に思いをはせてほしい。

この遺言に感銘した正之は、寛文8(1668)年に「家訓十五力条」を制定。家訓十五力条は、将軍家と運命を共にすることなど、藩の指針を示した憲法のようなもの。以降の藩主や藩士は、これを忠実に守った。家綱の後見人を任された正之は11歳の家綱を立派な將軍にするため、將軍としての心得を書いた「輔養編」を編さん。自らも教育に当たった。藩政では、次々と政令を出して諸制度の改革に取り組んだ。正之公の政策を以降に列記する。

- ・武家諸法度、軍令、軍禁や諸掟などを発令
- ・殉死の禁止
- ・租税見直しと殖産興業

その他にも、危機に備えて米を備蓄する社倉制(危機管理制度)を実施。領内で旅人や商人が病気になるたら医療を施すこと(救急医療制度)や90歳以上の者には生涯扶持米を支給すること(年金)など近代日本の社会保障制度の礎をつくった。乞食を集めて職業訓練を実施するなど、さまざまな社会福祉政策も実施した。

民衆の生活を第一に考え、時代に合わせた独自の政策を展開した正之。その強力なリーダーシップは、会津藩の人口を大幅に増やし、国力を充実させた。晩年、神道に入った正之は、師の吉川惟足から神道最高の奥秘を伝授され「土津霊神」の靈号を授けられた。これが土津神社の名前の由来となっている。寛文12(1672)年、会津

生前の遺言どおり、正之は見祢山に葬られ、土津神社が建立された。民衆のための政治をし、民から神のように崇められた正之は、見祢山の地で本物の神となった。

●寛文元(1661)年
会津において殉死を禁じる。この年初めて吉川惟足に神書を講じさせる。

●寛文3(1663)年
領内の90歳以上の高齢者に口米を給付。

●寛文4(1664)年
民間学校・稽古堂を開校。米沢藩、正之の奔走で改易を免れる。

●寛文8(1668)年
將軍から松平姓と葵の紋の使用を許可されるが正之は辞退。会津藩家老田中正玄を江戸に呼び「家訓十五力条」を授ける。

●寛文10(1670)年
23年振りに会津に帰国

●寛文11(1671)年
吉川惟足から吉川流四重奥秘を伝授され、土津霊神の靈号を授けられる。

●寛文12(1672)年
会津に帰国、磐梯神社を参拝し、寿藏地を見祢山に定める。12月18日未明、正之、箕田邸で没する。享年62歳。

●延宝元(1673)年
3月27日、正之見祢山に埋葬される。

●延宝2(1674)年
土津霊神碑が完成する。

●延宝3(1675)年
土津神社が造営される。土田堰が完成。入植が始まる。

●慶応4(1868)年
戊辰戦争で土津神社が焼失。御神体を磐梯神社に移す。

●明治5(1872)年
土津神社の社地と立ち木などが民間に払い下げられるが、翌年、有志の募金で買い戻す。

●明治13(1880)年
土津神社社殿が完成。ご神体を移す。

●大正4(1915)年
土津神社増改築が終了。社格の昇格運動を実施。

●昭和47(1972)年
保科正之公300年祭を挙げる。

●昭和62年(1987)年
正之公の墳墓と土津神社一帯が国史跡指定を受ける。

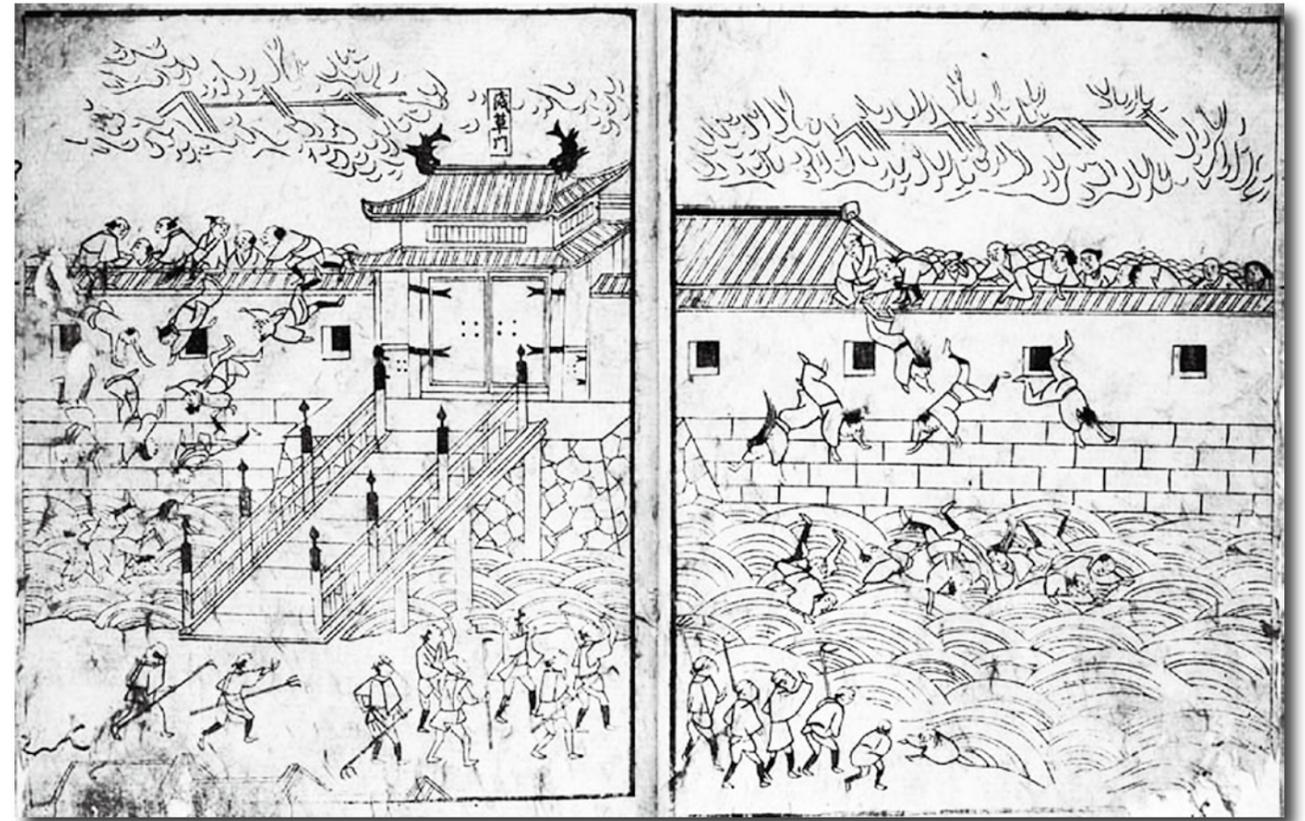
●平成23(2011)年
保科正之公生誕400年祭を挙げる。



1. 学びいなどで開催された「保科正之公生誕400年記念パネル展」。町内はもとより県内外から多くの人々が足を運んだ。写真は退職後などに活躍する「地域のリーダー」を育成するため学習をする会津若松市河東公民館の「わくわく夢塾」のメンバー。参加した17人は「猪苗代の偉人を考える会」の鈴木清孝さんから説明を受けながら、正之公の功績などについて学んだ。

2. 日本初の上水道として完成した玉川上水の取り入れ口（東京都羽村市）。正之公の時代から有効に利用され、現在でも一部が東京都民に飲料水を提供している。

3. 江戸城天守閣跡（東京都千代田区）明暦の大火後、再建されなかったせいか、江戸城に天守閣があったことはあまり知られていない



明暦の大火当時の浅草門。牢獄からの罪人解き放ちを「集団脱走」と誤解した役人が門を閉ざしたため、逃げ場を失った多数の避難民が炎に巻かれ、堀を乗り越えた末に堀に落ちていく様子（「むさしあぶみ」より東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

正之公に学べ

江戸時代最大の大火事「明暦の大火」。
東日本大震災の被害に見舞われた今年、
江戸時代の災害対応やその後の復興策に、にわかに注目が集まった。
その中心にいたのは正之公。
民衆の暮らしを第一に考えた正之公の施策などから、
私たちが学ぶべき事とは

あったが（例えば町屋では間口1軒につき3両1分）、合わせて16万両もの金が民衆の生活を支えるためにつぎ込まれた。その後も、参勤交代で江戸にいた大名たちを国に帰し、江戸の人口を一時的に少なくすることで米価や材木の価格の高騰を抑えるなど、斬新な発想で江戸の復興に努めた。

防火対策としては、上野広小路のような道路の拡張、延焼防止帯や火除地などを設置した。そして、災害時の迅速な避難のため橋を増設し、同時に橋を火災から守る火除地の設置、近くには避難場所となる緑地も設けた。また耐火建築として、土蔵造や瓦葺屋根などを奨励するなど、災害に強いまちづくりに取り組んだことも特筆すべきだろう。

定火消制度が創設されるとともに、町人たちの間で自主的防火組織が発足したのもこの大火の後だった。

大火で被災した江戸城の復旧では、天守閣の再建をめぐって老中たちと真つ向から対立した。天守閣の再建が急務であると主張する老中たちに対し、正之公は「江戸の復興と民政の安定こそが重要。無用の長物に金をかけるべきではない」と主張。結局、天守閣は再建されず、現在

明暦の大火からの復興

明暦の大火は、明暦3（1657）年1月、江戸で発生した大規模火災。外堀以内のほぼ全域、天守閣を含む江戸城、多数の大名屋敷や市街地の大半を焼失した。江戸の6割に当たる4万8千戸が被災し、10万人以上の死者を出した（3万から10万と資料により異なる）と伝えられる大惨事だった。延焼面積、死者数共に江戸時代最大で江戸の三大火の筆頭に挙げられている。

この大火の鎮圧に当たったのが正之公で、被災者救済のために6カ所まで7日間の炊き出しを行った。「犠牲者をそのままにしておくことはできない」と、幕府の費用で埋葬や供養を実施した。

浅草にあった幕府の米蔵に火が迫った際には「消火を手伝った者は自由に米を持ち出してよい」と発令。民衆と協力して見事米蔵への延焼を防ぎ、米蔵を守った。民衆が持ち帰った米は、そのまま被災者の救済に回り、まさに一石二鳥の結果となった。

火災後は、大名、旗本や御家人だけでなく、町人も対象とした家屋再建費用の給付を実施。身分制社会の中で、格の差は

の江戸城天守閣跡のように石垣だけが残った。

民衆の生活安定を第一に考えた正之公の政策によって、そのお金は全て民衆のために、町の復興のために使われた。

玉川上水の開削

民の暮らしを第一に考えたのは、何も災害時だけではない。明暦の大火からさかのぼること3年、急激な発展と人口増加を遂げる江戸では飲料水不足が深刻化していた。そこで正之公は水不足解消のため、玉川上水の開削を計画した。

多摩川の水を江戸に引き込むという、当時としては大規模な工事。膨大な費用に幕閣からは反対意見も出た。しかし、江戸市民の生活のためには水が必要だという正之公の主張が受け入れられ、玉川上水は完成したのだった。

常日頃から民衆を第一に考えてきた正之公は、明暦の大火という非常時にも、その後の復興期にも見事なリーダーシップを発揮した。

地域での消火設備や日常の防火体制の強化、地域住民の連帯感の醸成。これらの教訓が、大震災後の現代に生きる私たちに求められているのではないかと。



江花 俊和 さん

猪苗代の偉人を考える会会長のほか、猪苗代山岳会長も務める。歴史にも自然にも詳しい猪苗代町の達人

していく中でも、反対した老中たちをことごとく説得してしまつた。それによつて周りも「正之公の言うことは正しい」となる。周囲から認められる実力を持つていたということだ。江 明暦の大火が起こつた時のさまざまな対応は圧巻だ。当時のあの発想ができた人は幕閣にいなかった。火災の後は、区画整理、橋の増設、上野広小路のようなど道路拡張など、まちづくりにも次々と手を打つた。

鈴 その素早さには驚くばかり。常日頃から積み上げた人徳や見識があつたからこそ、幕閣たちも従つたのだろう。小 関東大震災後の復興計画を立てた後藤新平と比較されることも多いが、それほどの大事業だつたということだ。都市と災害は切り離せない。災害に強いまちづくりをしていかなければならない。そこ

江 民衆を第一に考えたので、江戸城の天守閣を再建せずにその金を町の復興に使つた。幕閣たちの猛反対する様子が目に浮かぶようだ。災害の時に人がすべきこと、大事にしなければならぬことは、正之公の頃から変わつていないですね。三人 全く変わつていない。鈴 震災自体は不幸な出来事だが、震災後、正之公が急激に注目され始めたことにうれしさを感じた。江 現代に正之公がいたら、復興対策などはものすごいスピードで行われていたはずだ。被災者のことを第一に考え、お金はいくらかかってもいいから、とにかくやれど。各大臣や各省庁を動かして、そんな号令を出していたと想像できる。鈴 災害時だけではなく、平時から特に人を大事にする、人を育てるということに努力を惜しまなかった。

お寺や私塾が中心だつた頃に、日本で初めて、身分を問わず学問を学べる稽古堂を造つた。それが同じく日本初の藩校「日新館」の建設につながつた。また、90歳以上の老人には、老齡扶持として米を支給するなど、福祉



小楡山 六郎 さん

野口英世博士に関する著書を執筆するなど、猪苗代兼載も含めた猪苗代の三大偉人に関する造詣が深い

政策も実施している。江 会津藩では、殖産興業にも力を入れた。商人や旅人が会津で病気になる、藩がその面倒を見るという福祉制度をつくつた。会津に行くのは安心だということ、商人や旅人がどんどん会津を訪れるようになり、藩が栄えた。小 これは日本初の商工観光政策かもしれない(笑)。一挙げればきりが無いほどの正之公の功績や美徳が、なぜ今まで知られなかったのでしょうか。江 一つは、幕末に朝敵となつてしまつたために、明治政府によつて、会津藩の歴史が長い間闇に葬られてしまつたこと。もう一つは、正之公自身が自分の功績を残すことを嫌つたからだと思う。小 4代の家綱公がまだ11歳と幼かつたため、自分の功績を全て家綱公のものにしてしまつた。家綱公の三大美事も正之公の立案。ナンバ12に徹したということだろう。江 私たちが生誕400年記念事業を実施したのは、こうした立派な人物が、猪苗代に眠つていて、それを皆さんに知つ

てほしかったからだ。正之公は、会津や猪苗代だけではなく、日本の誇りと言つてもいい人物。民衆のためにこれだけの功績を残した政治家は、日本の歴史上いないのではないかとさえ思う。鈴 皆さんが正之公のことをよく知り、誇りを持つことは地域への愛着にもつながる。また今回のイベントでは、官民が一体となつた協働の意識を感じることもできた。小 近年まで、正之公や猪苗代兼載などの偉人の功績が歴史の中に埋もれてきた。生誕400年を節目に、こうした偉人の功績を顕彰し、それを人づくり、地域づくりに生かしていくことが必要だ。江 私たちの活動の目的は、まさにそこにある。

震災からの復興にも、新しい猪苗代、新しい福島を作つていくためにも、正之公のような強力なリーダーが必要だ。そういう人材が今、求められている。



鈴木 清孝 さん

猪苗代の偉人を考える会事務局長のほか、いなわしろ民話の会会長も務める。民話の語りなどで活躍する



KOBIYAMA ROKURO

EBANA TOSHIKAZU

SUZUKI KIYOTAKA

考察 保科正之公

この町にゆかりのある偉人がいる。
郷土が生んだ偉人の遺徳・偉業を顕彰したい。
「猪苗代の偉人を考える会」は、こうして立ちあがつた。
同会の中心として活躍する3人に
正之公について、この町の未来について語ってもらう

皆さんが考える正之公の魅力や優れた点とは
江花俊和さん(以下 江)
正之公の大きな功績は、幕閣の古い体質を変えたリーダーシップ。まず驚かされるのは、その発想力だ。
当時の幕閣たちは、御金蔵にある16万両を戦争のための軍資金としか思つていなかった。しかし、正之公は、明暦の大火の時にこの金を民衆の救済に当てた。長年の慣習から転換し、民衆第一の考えから、反対する幕閣を説得して成し遂げる。その発想力、素早い機転と行動力が東日本大震災後に注目されている正之公のリーダーシップだ。
小楡山六郎さん(以下 小)
時代の先を読む優れた先見性を持つていたのだろう。戦国時代から平和な時代への過渡期、民政の安定を図らなければ、幕府が危うくなるという時代の流れに気付いた。武断政治から文治政治への転換を果たした役割は大きい。
鈴木清孝さん(以下 鈴)
時代の変革の中にあつても、常日頃から勉強を怠らず、儒学、朱子学や神道と異なるものを学んで知識や人格を高めていった。それがいろいろな人から慕われた理由だ。玉川上水の建設など、新しい政策を打ち出

命を守る鍵は「地域の絆」



【DATA】一関市と旧藤沢町は9月26日に合併し、12万都市の新一関市が誕生した。藤沢町の自主防災組織率は、現在95.3%。震災直後から自治会や各種団体が、沿岸部の被災地に対する支援活動を継続中。現在も約200人の被災者を受け入れている。



倒壊した建物から町民を救出する訓練に挑む第24区レスキュー隊「Disaster Rescue Team24」

「今までの訓練は、まさにこの時のためだった」。東日本大震災の後、町民の一人は自信を持ってそう答えた。岩手県一関市藤沢町。東北地方を代表する自主防災組織として、全国にその名を知られる、同町の第24区自治会。そこには現代の正之公がいた。【取材協力＝一関市政情報課】

藤

沢町で自主防災活動への取り組みが本格化したのは8年前。第24区自治会では、17年4月に自主防災組織（以下自主防）を設置。以来、宮城県沖地震を想定した各種訓練に取り組んできた。

高い防災意識と強力なリーダーシップを持つ佐藤幸生さんの指導の下、目標を持って訓練に臨み、達成できなかったものは次回の訓練で克服する。それを毎回繰り返してきたのだ。

東日本大震災では、余震を含め震度6弱を3度も観測、本町を大きく上回る被害を受けながらも、犠牲者を出さなかった。それは、何度も何度も繰り返さ

れた訓練の成果に他ならない。徹底的にリアルさを求める同自治会の訓練は、最後までシナリオを明かさない。

訓練に参加した人の中で「あなたは救助係」「あなたは炊き出し係」と役割が決まる。けが人の手当て、心肺蘇生、捜索や炊き出しなど、全てが現在進行形で進んでゆくのだ。

「災害時に誰がいるかなんて分からない。その場にいる人たちが、何の役割でもこなせることが大前提。いざという時のために、普段から何ができて、何ができなかったかを確認することが必要だ」と佐藤さんは力を込める。

届けたり、炊き出しをしたりした。現在も継続的な支援活動を行っている。

同時広域的に発生する大規模災害では、消防や行政の支援の手が届くまでには数日かかる。それまでは自力で生き延びるしかない。藤沢町は同自治会だけでなく、町内に41ある全ての自主防が、自主的に住民の安否確認や避難誘導を行った。

「自主防は組織することが目的ではない。大事なことは、災害時に、それが確実に機能するかどうかだ」と話す佐藤さん。その前提として「日頃から隣近所や地域との信頼関係を築くことが大切」と語る。

同自治会は、余った田んぼを利用して、隣接する5つの自治会と共に復興水田「がんばっ田」を開設。町内に移り住んだ沿岸

東

日本大震災では、町中のライフラインが寸断されたり、高齢者世帯を全て回って安否を確認し、避難所へ誘導した。だが、指定避難所の自治会館は強い揺れで損壊していた。外は追い打ちをかけるような雪。そこで、隣家のビニールハウスを借り、暖房器具や毛布を持ち寄り、一晩を過ごした。

「倒れない、壊れない、雪が積もったら揺らせば落ちる」。普段から、災害時にビニールハウスは利用できることを話し合っていたからこそその行動だった。翌日には地域のコミュニティセンターに米や野菜を持ち寄り、避難所を開設した。

特

筆すべきことは、震災翌日から壊滅的な被害を受けた沿岸部への支援活動を開始したことだ。自分たちが被災しているにもかかわらず、隣接する宮城県気仙沼市に救援物資を

部の人たちと一緒に田植えや稲刈りを行い、収穫したあきたこまち約1トンを「復興支援米」としてその人たちに配った。

「こうした活動も一緒に復興を目指す気持ちを伝える、心の支援の一つ」と佐藤さんは話す。

近

年、高齢化や核家族化が進み、家庭の防災力は低下、地域の連帯感も薄れてきている。防災の基本は「助け合い」。まずは自分、次に家族、そして隣近所や地域へと、足元から支援を広げていく防災の構図が欠かせない。

震災の翌日から支援活動を開始した藤沢町の自主防。自分たちの命を守るためにも、復興を支えるためにも「地域の絆」が大切であるということを実践で証明している。

無駄のない訓練ほど無駄なものはない



第24区自治会地域防災リーダー 佐藤 幸生 さん

Profile 16年に町自治会協議会が主催した地域防災リーダー養成研修を終了し、第24区防災リーダーに。一関市消防本部消防長から消防・防災セミナー指導者の認定を受け、地域防災活動の中心役割を担っている。

訓練は「命を守るため」にある。だが、多くの防災訓練はあらかじめ想定が周知され、役割や行動が決められている。分刻みで時間が設定され、シナリオ通りに進んでゆく訓練を「真の訓練」と言えるのだろうか。

東日本大震災では「想定外」という言葉が何度も使われたが、災害にシナリオはない。リーダーがいなくても機能する自主防災組織、どんな状況でも対応できる自主防災活動が重要だ。そのためには、普段から「何ができて、何ができないのか」を知らなければならない。無駄のない訓練ほど無駄なものはない。本気で訓練に臨み、無駄や失敗を繰り返すことで、本当に必要なことが見えてくるからだ。

ビニールハウスが有効利用できることも、人力救急車の制作も、酒を酌み交わす中で出てきたアイデア。普段から地域の人とコミュニケーションを取り合い、話し合いを重ねてほしい。それこそが、地域の住民機能を最大限に生かした自主防災組織をつくることにつながるのだ。



- 1_ リヤカーを再利用した「人力救急車」は、車が通れない道で負傷者や病人などを搬送する
- 2_ 応急手当の訓練の様子。どの住民も応急手当や心肺蘇生の方法を知り、実践できるという
- 3_ 炊き出し訓練は、その日の天候や参加者の人数などによってメニューを決める

地域との協力は必要不可欠だ



町消防団第5分団 遠藤 涼介 さん (新屋敷)

震災時は家族の無事を確認し、すぐに消防団員として活動した。地区の人にも安否確認などを手伝ってくれた。あらためて非常時には地域との協力が不可欠だと感じた

困っている人のために炊き出し



町婦人連絡協議会長 宇月 静子 さん (新北町)

震災直後は、私たちより困っている人が大勢避難していた。その人たちを助けたいと思い、炊き出しに参加した。その時に避難していた人とは、今でも交流が続いている

復興への鍵も「人との絆」

民衆の暮らしを第一に考え、会津藩はもとより、国中に民政を敷いた正之公。人間一人一人が大切だということ、人と人とのつながりが大切だということ、正之公の時代から変わらない。きっと、これからも！

東 日本大震災で震度6強を観測し、その後の原発事故によって避難勧告が出された双葉町。同町では、全町民が町外に避難を余儀なくされ、県内の市町村や埼玉県加須市などで生活している。

町内川桁に同町が建設した仮設住宅には、10月から8世帯が入居。本町から復興を目指している。

会 田城行さん、美由紀さん宅はその一軒。猪苗代での暮らしを決めた理由は「二人の子どもたちの生活を考えた」だった。

「4月下旬からリステル猪苗

代に来了。猪苗代は県内で放射線量が比較的低い地域であり、同じ双葉町から来た人も多い、子どもたちにはいい条件だと思った」と会田さんは振り返る。

県外の小学校では、福島から転校した子どもがいじめられた例もあった。子どもたちが新しい学校に馴染めるのか不安だったが、それは乗り越えし苦労に終わった。東中学校に転入した長男聖矢さん、長瀬小学校に転入した次男拓矢さんには、すぐに新しい友達が多かった。

もと双葉町の小学校以来の知り合いだが、現在は仮設住宅の自治会として新しい近所付き合いが始まっている。

「双葉町や学校の情報などを共有できて役立っている。親戚や知り合いがいらない土地で、自分たちだけだったらどんなに心細かったか。地域の付き合いの大切さを感じている」と話す会田さん。

「これから冬を迎え、雪の多い季節になるので、住宅の近所の人や防犯パトロールの人なども心配して声を掛けてくれた。皆さん優しいですね」と笑顔をみせる。地域との交流は、自治会以外へも少しずつ広がりをみせている。

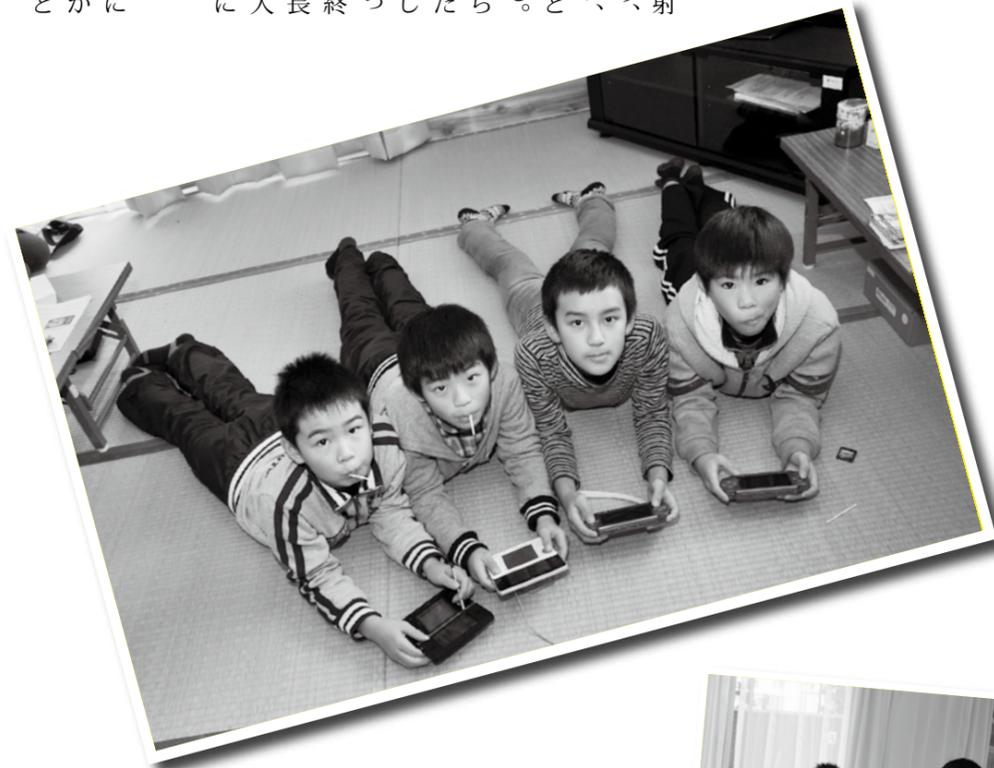
か つて正之公によって会津藩にもたらされた五人組

には、連帯責任や相互監察などで、町村の自治や取りまとめを強化する狙いがあった。しかし、同時に相互扶助の目的があったことも忘れてはならない。

五人組から隣組へ、隣組から行政区・自治会へ。時代の移り変わりとともに、その名称、役割や組織構成は変化した。人と人が互いに助け合うことの重要性に変わりはない。

福島県の復興のためには、沿岸部と内陸部が一体となって取り組むことが不可欠だ。それなくして復興は語れない。

県民全員が「福島県は復興した」と自信を持って言えるその日まで、復興支援への取り組みは続く。この町から復興を目指す新しい仲間との近所付き合いは、一番身近な復興支援。決して特別な事ではない。



写真上 仮設住宅内に設置された談話室は、放課後の子どもたちが勉強をしたり、遊んだりするスペースとしても使用されている。仮設住宅近くに住む大坂瑠偉さんは「家の近所に友達が増えてうれしい」と話す。この日はたまたま4人の同級生が遊んでいた。左から青木大知さん、松木伶大さん、大坂さん、会田拓矢さん（共に長瀬小4年）
写真下 昔懐かしい遊び「輪ゴム飛ばし」で遊ぶ4人。掛け声は「ウソップ ワゴーム」？



新しい体験を楽しみながら生活していく



会田 美由紀 さん
(川桁、双葉町出身)

震災後、すぐに避難所に移動した。次の日に避難命令が出され、取るものも取らずに浪江町に避難。以降、本宮市、埼玉アリーナやリステル猪苗代などを経て、ここでの生活が始まった。

原発の近くに住んでいても、原発事故が起こった時や内部被ばくなどの危険性について、一度も説明を受けたことはない。避難場所も事故の経過とともに二転三転した。せめて、災害時の避難についての想定くらいできなかつたのかと悔しく思う。

これから先がどうなるかは、町の方針が定まらないと分からないので、双葉町にはそれを急いでほしいと願う。

家族は全員無事だった。子どもたちは新しい友達が増え、いい経験をしている。会津や郡山などに出掛けること、これからやってくる冬の暮らしも新しい体験だ。そうポジティブに捉えて、今を楽しみながら生活していこうと思う。

地域の皆さんの安全安心に努めていく



猪苗代警察署 長瀬駐在所
福田 真也 さん

東日本大震災に派遣され、浪江町などでの捜索活動を行った後、5月から猪苗代警察署長瀬駐在所に赴任した。

川桁に「猪苗代町上川原応急仮設住宅」が完成し、8世帯が入居した。皆さん穏やかな人ばかりだが、ここに避難するまでの間には、辛いこともたくさんあったようだ。同じ福島県民として、そして警察官として、皆さんが犯罪に遭わず、安心して暮らせるように訪問活動などを続けていきたい。

これから猪苗代は厳しい冬を迎える。新しくこちらに来た皆さんにとっては、慣れない雪道の運転や雪かきなど心配は尽きない。いわきナンバーの車両には車間距離を十分取るなど、思いやりのある運転をしてほしい。まったく知らない土地での暮らしで、不安を抱えている人も多い。町内の皆さんも共に助け合ってほしい。この町には、それができる下地があると感じている。

人間の力では、自然災害の発生を止めることはできない。しかし、そこから力を合わせて立ち上がることはできる。一人一人が、できることを精いっぱいすることが大切だ。

警察では訪問活動、警戒活動のほかには交通事故や山岳遭難の防止、雪道の運転方法などの広報や指導などに努め、地域住民の安全安心を守っていく。



福島復興の 羅針盤に

私たちの命を守るために、
大切な家族の命を、そして地域を守るために
必要な事は、正之公の時代から変わっていない
みんなで同じ方向を見ていこう
私たち自身が福島復興の羅針盤に



参考文献
「保科正之の生涯と土津神社」
猪苗代の偉人を考える会発行

戊辰戦争の際に一度は消失した土津神社。しかし、それを再建したのは、正之公の教えを受け継ぎ、大切に生きてきた猪苗代の、会津の先人たち。彼らは、正之公の教えを顕彰することの大切さを知っていた。だからこそ私財を投じてでも土津神社を再建したのだ。

名君として歴史にその名を残した正之公。会津にとどまらず、幕政でも活躍したその手腕や姿勢など、私たちが学ぶところは多い。

正之公は、平時、災害時にかかわらず、民衆の命や生活を守ることを優先した。災害の状況に合わせて、前例のない施策に取り組み、多くの民の命とまちを救った。

民衆一人一人を守ることが、国力や生産力を守り、不満からの暴動を防ぐ。ひいては、それが幕府を守ることになることを知っていたからだ。

東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われた中、正之公の生誕400年という節目を迎えた。これは単なる偶然ではない。正之公が、愛した会津の民を守ろうとしている。私たちが勇気づけようとしてくれているのではないだろうか。

震災からの復興を目指す私たちが大切にすべきことは、自分の命、家族や地域の人の命を守ること。それは、正之公の時代から何も変わっていない。

一つは、人とのつながりだ。人間は、一人では生きられない。さまざまな人との関わりや信頼関係が互いに人を生かしている。そのつながりを大切にしていくことが、復興には欠かせない。お互いを信頼し、尊重し合い、助け合うことで未来に向けて進んでいけるのだ。

そしてもう一つは、強力なリーダーを持つこと。災害時には、命を守るために何をすべきかを瞬時に考え、行動しなければならぬ。さらに想定外の災害を乗り越えるには、規格外の支援や行動が必要となる。その際に、的確な判断を下し、行動できる、正之公のようなリーダーが必要なのだ。

リーダーは一人いればいいわけではない。災害時には、全員が集まって行動できないことがある。そのためにも家族に、地域に、各コミュニティに、数多くのリーダーが必要なのだ。

正之公のような進むべき道を示す羅針盤が無数にあれば、みんなが迷うことなく復興に向かっていける。一人でも多くのリーダーを作ろう。一つでも多くの羅針盤を作ろう。正之イズムを学んだ私たちが一体となって、猪苗代という名の羅針盤になろう。

福島復興のための羅針盤に。

特集 不変の羅針盤 終わり